詩編 18 編の黙想（3）32～51　主は生きておられる:主は自らへりくだり（2020 年 5 月 13 日用 TM）

　コロナイウルス感染は、全国的に格差はあるものの減少傾向にあるようです。しかし、パンデミックは第二次、第三次で酷くなり、多くの死者を出した歴史があります。肩の力を抜いて、しかし、細心の注意をして、主なる神からいただいた隣人と自分のいのちを大切にしましょう。詩編 18 編 32 節以下を読みましょう。

・詩編１８編は、32 節から主なる神から油注がれた王の救いの祈願に入ります。王のために祈るという習慣のない私たち日本人にはしっくりこない箇所かもしれません。私たちは指導者に正義と真実をもって市民を統治することに期待し、裏切られ、期待し、裏切られてきました。その末に来て下さったのがイエス・キリストです。キリスト教には「God, Save the Queen」などと祈り、歌う教派もありますが、バプテストはまさに英国教会から分離した経緯があり、為政者のために祈る習慣がないのかも知れません 10 年前、ポーランドの大統領が事故死したときの欧州人たちの嘆きを見ました。そのとき、民の指導者のために祈らない、祈れない私たちの何かの欠落を感じました。尊敬できない指導者を立てて、無関心でいてはなりません。危機の時に、えらいことになります！無政府主義と無批判で王や指導者を肯定してしまう無邪気さの狭間を進むことが大切です。
・王は祈ります。「主のほかに神はない。神のほかに我らの岩はない」(32 節)。「主は命の神（主は生く！）。「わたしの岩をたたえよ。わたしの救いの神をあがめよ。」(47 節)。主なる神によって立てられた王は、「主のほかに神はない」と告白します。このお方を信頼すべき「岩」(sūr) であると言います。そして、この岩なる神、救いの神をあがめ賛美します。自分の弱さや抱えている諸問題だけではなく、信頼を寄せ神あるいは主イエスを見挙げましょう。
・当時、民を護る武人でもある王、民衆を武力によっても護る使命を持つ王は、自分の力で立つのではなく、主なる神の助けを祈り、主なる神の助けによって行動します。主は、「力を帯びさせ」（力をもてわが帯となし 40 節にも）、彼の「道を完全にし」（ぬかりある人の道を補完して下さり）、彼の「足を牡鹿のようにし」（速くし）「高い所に立たせ」（闘いをするとき、高い位置取りをすることが勝利をもたらす）、彼の手を戦いのために訓練して下さり、青銅の強い弓を引く力を与えて下さる。こうして、詩人は自分の強さや知恵ではなく、主なる神の助けに信頼するのです。主なる神を「あなた」と「わたし」の関係で呼び、救いの盾を与えて下さり、右の手で支えてくださると言います。主は、「自ら降り（へりくだり wəanwatkă)」、王を強め、彼の道を広くして（tar/hîb)、足が滑らないようにして下さる（38 節）のです。御子イエスが、ご「自分を無にし、僕の形になり、へりくだる」（フィリピ２：6-8）ように、主なる神は、自ら降り、人間の野望、自分を高くする者たちを砕かれます。
・メシア＝キリストとしてのダビデ系の王　38 節以下は主なる神によって敵を打ち砕く様子が描かれています。北イスラエルと南ユダは元来兄弟のような国で、北イスラエルの民やサウルも主なる神に向かって叫んだのですが、42 節によれば主なる神は彼らの叫びには応えないといいます。「神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられる」（口語訳)。ダビデとその王朝の美化と王への過剰期待、戦争賛美は考えものです。主イエスがダビデの末裔、キリストであるのに、なぜ「ダビデの子」という称号を避けられたのか、その想いを黙想してみましょう。主イエスは非武装でした。
・47 節以下は主なる神への賛美で終わります。「いつくしみはとこしえに」(hesed ōwlăm)。「国々」の中で（50 節）つまり、異邦の民も含めて主に仕えることになると語っています。